

V 平 城 京 の 調 査

① 西市の調査（第123 - 23 次）

この発掘調査は、大和郡山市九条町にある平城京西市跡に、マンション建設の計画がおこったため、奈良県教育委員会の依頼を受けて行なったものである。

西市は、平城京右京八条二坊にあったと推定され、かつては五・六・七・十・十一・十二坪の計六坪を占めていたとされていたが、今日では、五・六・十一・十二坪の計四坪であったと考えられている。今回のマンション計画は十二坪内^註で生じたものであったから、発掘調査も十二坪内の遺跡の状況を知るための予備的調査として行なわれた。発掘調査はA～Eの5ヶ所にトレンチを入れて行ない、検出した遺構・遺物は、大略次のとおりである。

遺構 検出した主たる遺構は掘立柱建物3棟、塀5条・溝2条でいずれも奈良時代のものである。そのほか、中世の土壌および溝が若干検出されている。

SB 01 Aトレンチの東南隅で検出され、3間×2間以上の掘立柱建物である。柱間は1m前後で短かく、小規模な小屋と考えられる。

SB 02 Aトレンチ西辺で検出された2間×2間以上の掘立柱建物で、北は中世の土取りで破壊されていた。柱間は約1.8mである。

SB 03 Dトレンチ内で検出された3間以上×2間以上の建物で柱間は約1mである。

SA 04 Bトレンチ内で2間分、Dトレンチ内でその延長部分と思われる柱穴1個を検出した。このSA04の位置はほぼ十二坪の南北を2分する位置に当たっており、西市内の市肆を区画するものと考えられる。

SA 05 Aトレンチ内で検出したもので、北で西に振れている。

SA 06 Dトレンチ内で検出した南北塀で3間分検出した。

SA 07 Dトレンチ内で検出した東西塀で2間分検出した。

SD 08 八条大路北側溝で幅4m、深さ0.5mを測る。東西5.5m分だけ検出した。岸はシガラミで護岸していたらしく、木杭が数本残っていた。

SD09 SD08に北から流れ込む溝で、幅1m、深さ0.4mを測る。位置としては西市の東西の中軸線に近いので、あるいは西市内の中央を南北に通じる市内の道路の側溝である可能性がある。

遺物 全体として遺物は土師器・須恵器が多量に出土し、瓦片はごくわずかであった。おそらく西市内には瓦ぶきの建物がきわめて少かったことを示すものと思われる。特に顕著な出土遺物としては銅製帯金具1点、和同開珎1点、神功開宝2点、銅製鋌、木簡5点などがあり、いずれもSD08から出土した。

まとめ 以上の発掘調査の結果、注目すべきことは次の通りである。

① SD08の検出によって、西市の南限が確認できたこと。

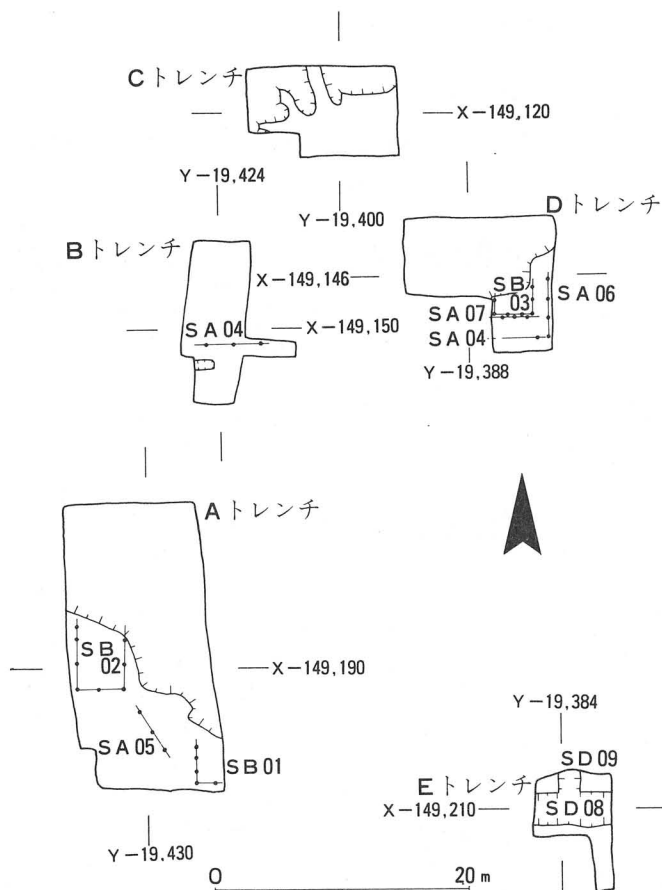
② 八条大路北側溝に流れこむSD09の存在からみて、Eトレンチ付近に門跡の存在が予想されること。

③ BトレンチおよびDトレンチで十二坪を南北に区画する塀SA04が検出されたことによって、西市内の市肆が坪を2等分した地割りで営まれていたことが推定されること。

④ Aトレンチ・Dトレンチで検出した掘立柱建物は、いずれも柱間が1～2m前後の小規模のもので、半月毎にひらかれたという市肆に関連するものと推定されること。

註 今泉隆雄「所謂『平城京市指図』について」

史林59巻2号 1976。



第11図 第123 - 23次西市跡発掘遺構図

② 左京二条二坊々間大路の調査（第123 - 26次）

本調査は宅地造成に伴う事前調査である。当該地は、第44次および第68次調査によって確認されている東二坊坊間大路西側溝の南延長部分にあたる。当初12m×3mの東西に細長い発掘区を設定し、側溝検出後その部分を南へ3m拡張した。

検出した遺構は、東二坊々間大路及び同西側溝SD 5870と、南北溝1、柱穴2、土塙1である。SD 5870は幅2.5m、深さ1m弱で、肩は一段、段があり、西肩はシガラミを設けて護岸している。発掘区西端の南北溝および土塙は、SD 5870廃絶後に掘削されており、柱穴は南北溝よりさらに新しい。

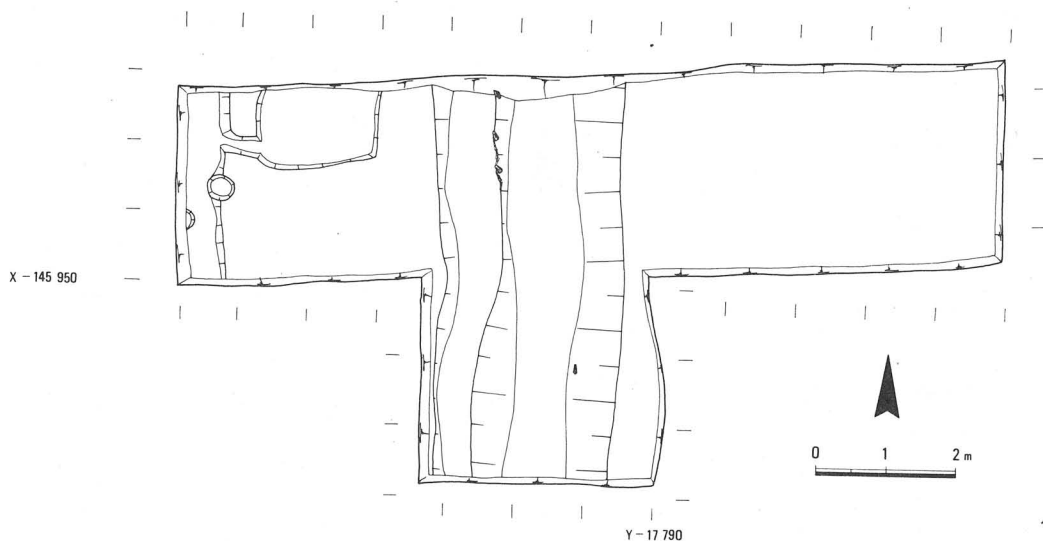
出土遺物には、18点の木簡および多量の瓦塼類、土器、木製品、金属製品等がある。木簡はほとんどが断片であるが、

（表）伊勢國安濃郡長屋郷甲可石前調錢壹貫

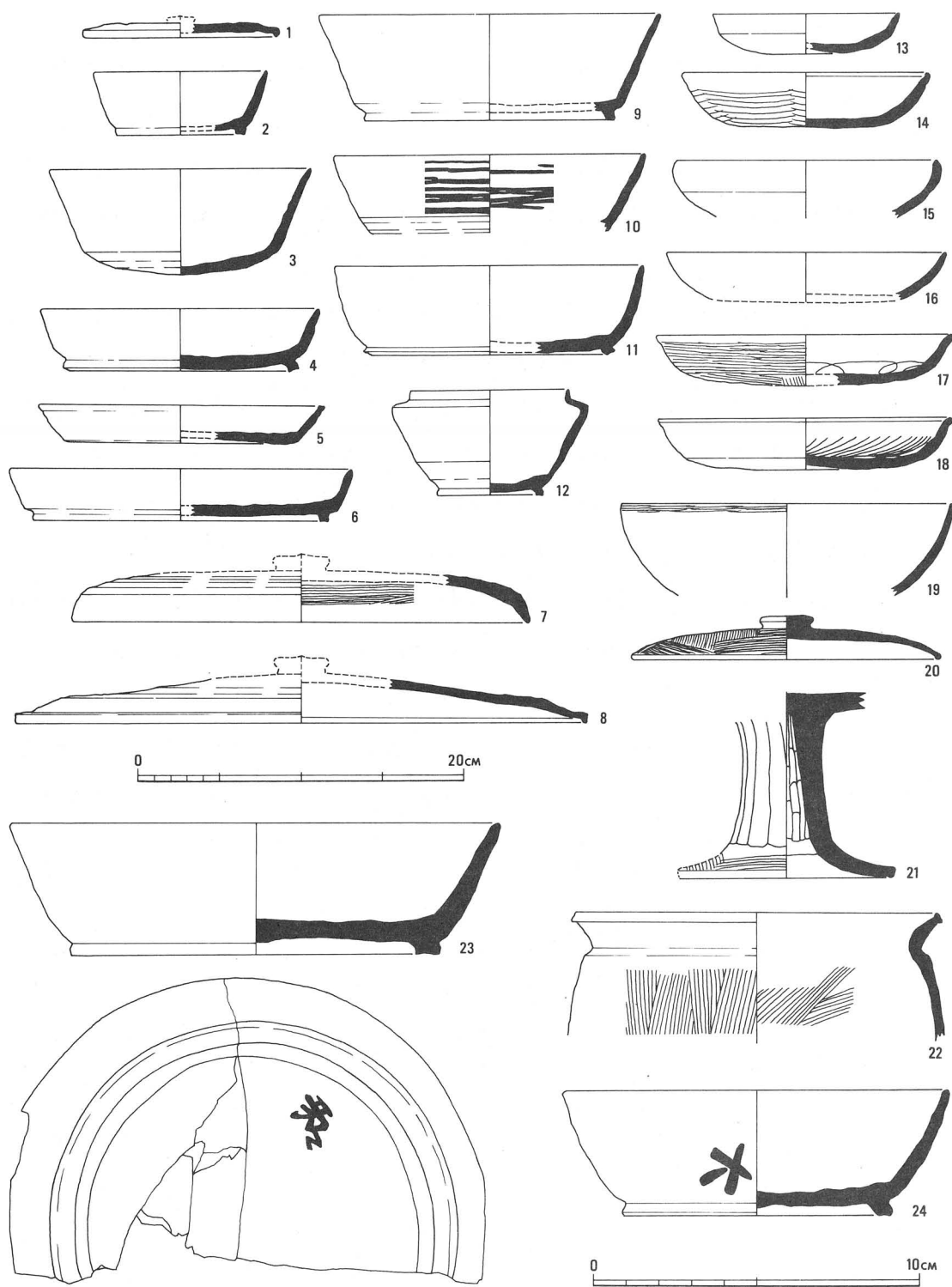
（裏）神龜四年十月

の記載のある1点は、奈良時代の早い時期に調を錢納したことを示す貴重な例として注目される。

瓦塼類としては、軒丸瓦 6135 型式・6308 型式各1点、6316 型式2点、軒平瓦 6664 型式・6691 型式各1点のほか、緑釉平瓦1点、「老」の刻印をもつ文字瓦1点



第12図 第123 - 26次発掘遺構図



第13图 SD 5870出土土器

および埴10点以上が出土している。

土器は奈良時代中期から後期のものが多く、なかに墨書土器7点（「和」「申」「下」等）、墨書人面土器1点、線刻土師器5点、製塩土器2点、転用硯3点、漆の附着した土器3点が含まれるいる。このうちSD5870下層から出土した土器（第13図）には、土師器杯A（14）・杯C（17・18）・皿A（16）・皿C（13）・椀A（19）・鉢B（15）・杯B蓋（20）・高杯（21）・甕A（22）、須恵器杯A（3）・杯B（4・9・10・11・23・24）・皿B（6）・皿C（5）・杯蓋（7）・皿蓋（8）・壺E（12）等があり、須恵器杯B・杯B蓋を利用した転用硯がめだつ。須恵器杯（10）は内外面ともにヘラ磨きが行われている珍しい例である。土師器杯C（17）は螺旋暗文だけで放射暗文を欠く。須恵器杯B（23・24）は墨書土器で、23は底部外面に「和」、24は口縁部外面に「大」を横位にしるす。これらは平城宮土器編年Ⅲ期（8世紀中葉）のものが中心である。

木製品には、櫛、人形、曲物、独楽型木製品、加工棒等がある。このほか和同開珎2点、帯金具巡方（烏油腰帯の銚）1点、飾金具、銅鈴（漆附着）石鏃、ふいごの羽口1点が出土している。

本調査は小面積の発掘であったためにSD5870の位置の確認にとどまり、周囲の遺構は明らかにできなかったが、豊富かつ多様な遺物から、周辺、特に坊間大路西側に重要な遺構の存在が予想される。今後の調査をまちたい。

③ 左京三条一坊々間大路の調査（第123－24次）

本調査は住宅建設に伴う事前調査である。当該地は北新の集落内で、平城宮壬生門のほぼ南にあたる。東一坊々間大路東側溝を確認すべくトレンチを設定したが、耕土下面から弥生式土器第Ⅰ様式の鉢を検出したのみで、大路側溝は検出されなかった。削平されたのか、あるいは、今回のトレンチよりさらに東に存在するのか、いずれかと考えられる。

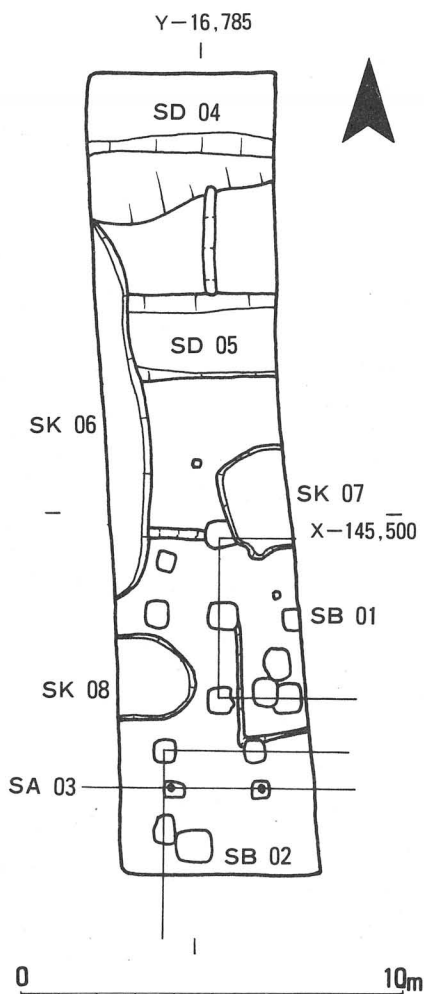
④ 左京二条四坊八坪の調査（第123－3次）

この調査は奈良市法蓮町金池での分譲マンション建設に伴うものである。調査地は一条通りの関西線踏切の西で、道路南側にあり、一条大路の南側溝と、左京二条四坊八坪の宅地遺構が想定された。

遺構は、調査区南半では耕土（25cm）・床土（10cm）下の茶褐粘質土、北半では黄褐砂質土面で検出した。検出遺構は掘立柱建物3棟・溝2条・土壌などである。

SB 01は梁行2間の東西棟建物と考えられる。柱間寸法は桁行1.8m（6尺）、梁行2.1m（7尺）である。SB 02は北西隅のみの検出である。柱間寸法は2.4m（8尺）等間。このほか、SB 02に重なって東西方向に並ぶ1間分の柱穴（柱間2.4m）があるが、建物か塀かは不明である（SA 03）。SD 04は調査区北端にある素掘りの東西溝である。深さ約0.6mで北肩は調査区外になり、溝幅はわからない。底面まで奈良時代の瓦・土器のほか、瓦器など中世の遺物を含んでいる。SD 05はSD 04の南2mにある素掘りの東西溝で、幅2m、深さ0.5mである。SK 06～SK 08はいずれも中世遺物を含む土壌である。

今回の調査で検出したSD 04は一条大路南側溝の位置にあたる。底面まで中世遺物を含んでいるが、これは一条大路が後世まで存続したことを物語るものであろう。SD 05は八坪の北を画する築地の南側雨落溝の可能性があろう。八坪の建物は柱掘形が一辺約0.6mと小さい。調査区が狭いため、いずれも建物規模を明らかにできなかったが、少なくとも2時期以上の変遷が考えられる。



第14図 第123－3次発掘遺構図

⑤ 右京一条二坊四坪の調査（第123－8次）

奈良国立文化財研究所新庁舎付属建物（厚生棟）新営に伴う事前調査である。調査地は庁舎西側の空地であり、右京一条二坊四坪の東南隅にあたり、一条大路北側溝の存在が予想された。調査は、建設予定地に東西14m、南北10mのトレンチを設定して行なった。ここには、県立病院当時のコンクリート基礎が随所にあるため、削岩機で破壊した後、バックフォールで表土の排土を行なった。病院建設時の整地土は約1.6mの厚さである。旧水田の下層は粘質土と砂質土が互層に約0.5m堆積し、中世以降のある時期に旧秋篠川の氾濫があった状況を示していた。これら堆積土の下層には、奈良時代の遺物を含む砂質土がみられたが、奈良時代の整地ではなく、これも水流による堆積土である。この堆積土面で幅約3m、深さ約0.5mの南北溝を検出した。埋土には中世の羽釜片を含んでいる。遺物包含層の下層は粒子の細かい灰白色の砂が堆積している。

以上のように、調査地は旧秋篠川の流路、あるいは氾濫原にあたっており、奈良時代の遺構は検出できなかった。最下層の灰白色砂層からの出土遺物がみられなかったため、その最初の氾濫の時期を限定することはできなかった。

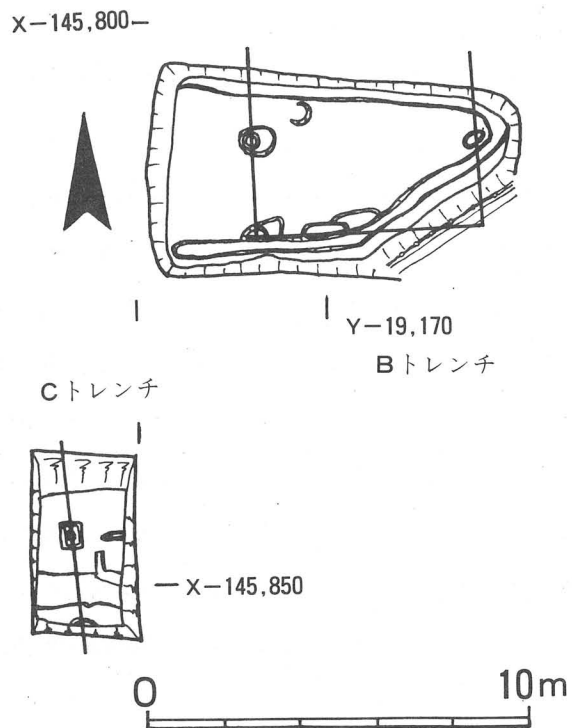
⑥ 右京二条二坊三坪の調査（第123－15次）

本調査は奈良簡易保険保養センター増築工事に伴う事前調査である。当該地は平城京右京二条二坊三坪ならびに西一坊大路・二条々間路にあたる。西一坊大路と二条々間路が丁字路に交わる平城宮玉手門前に、条坊遺構の確認を目的として幅7m・長さ32mの東西トレンチAを設定し、三坪内には小トレンチB・Cを設けた。

敷地は、保養センター建設当時に耕土上面に約1.2mの盛土を行なっている。旧耕土および床土を排除すると地山となり、現地表下約1.6mの深さである。Aトレンチでは地山上に部分的に薄い整地層が残っていた。

Aトレンチでは床土下部から奈良時代の瓦片・土器片が出土したが、整地層・地山面からは中世以降の耕作溝多数と土壌を検出したのみである。B・Cトレン

チでは1辺0.8～~~0.2~~^{1.2}mほどの掘立柱掘形を確認した。Bトレンチでは柱掘形4ヶ所を確認した。梁行3間（7尺等間）で桁行柱間が8尺の南北棟建物と推定される。Cトレンチでは南北に約8尺隔たった一对の柱掘形を確認した。B・Cトレンチともに掘形は深さ10cm程と浅く、当地域が大規模な削平を受けていることが判明した。Aトレンチにおいて当初予想された西一坊大路西側溝など条坊遺構が確認できなかったのもこのためと考えられる。



第15図 第123-15次発掘遺構図

⑦ 右京二条三坊十一・十五坪の調査（第123-17次）

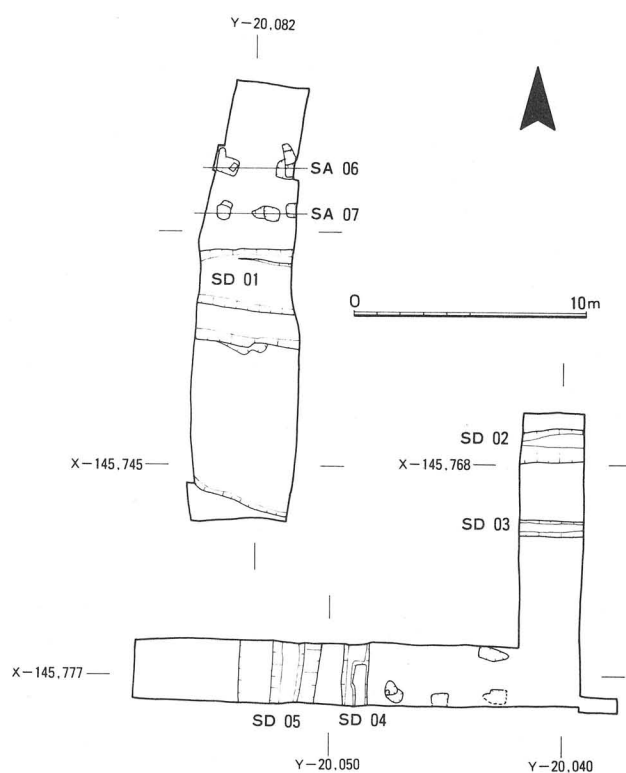
本調査は、住宅等建設に伴う事前調査として実施したものである。当該地は、奈良市青野町105、56-1番地で、平城京の右京二条三坊十一・十五坪にあたり、二条々間路と坊間小路の側溝の存在が予想された。そこで、条間大路北側溝位置に西発掘区を、同北側溝と坊間小路東側溝位置にL字形に東発掘区を設定した。

西発掘区では、二条々間大路北側溝SD01と、これに平行する2条の東西塀SA06・SA07を検出した。SD01は、幅4.4m、深さ0.5mの素掘り溝で、南側には幅1mほどのテラス状平坦部を設けている。溝内には黒灰色の砂や黒色粘土が交互に堆積し、多数の土器・瓦等が含まれていた。SD01出土土器は平城宮土器編年Ⅱ～Ⅲ期のものである。SA06はSD01北岸から北約3.5mの位置にあり、1間分検出した。柱間は約2.7mで柱抜き穴がある。この抜き穴から6284-C型式の軒丸瓦が出土した。SA07は、SA06とSD01との中間にあり、1間分検出した。柱間は

約 2.1 m で柱掘形も小さい。SD 01 の南は黄褐色・赤褐色粘質土の地山で、この部分が二条々間大路の路面である。

東発掘区では東西溝 SD 02・SD 03 と南北溝 SD 04・SD 05 を検出した。東西溝 SD 02 は幅 1.3 m、深さ 0.2 m の素掘りの溝である。埋土から少量の土器が出土した。SD 03 は SD 02 の南約 3 m の位置にあり、規模は SD 02 より小さい。南北溝 SD 05 は素掘りで幅 3.5 m、深さ 0.7 m、坊間小路東側溝である。溝内には灰色砂礫層が堆積し、同層中から平城宮土器編年Ⅲ～Ⅳ期の土器が出土した。SD 05 のすぐ東に位置する素掘りの南北溝 SD 04 は幅 1.1 m、深さ 0.3 m の規模をもつが、時期等是不詳である。このほか、数個所で柱穴を検出したが、性格等は明らかでない。

さて、上記のことから平城京の条坊計画についてみると次のような結果がで、SD 03 は小規模であるが、条間大路南側溝と考えられる。玉手門心とこの条



間大路心との方位は西で南へ $0^{\circ}18'36''$ 振れている。また、西一坊大路心を玉手門心より西 9 丈、坊間小路幅を 2 丈とすると、坊間小路東側溝と玉手門の心々間の計画長は 3230 尺となる。SD 05 の溝心と玉手門間の振れを考慮した距離は 958.7m であり、計画長でこの距離を除くと造営尺 0.2968m が得られる。ちなみに、この数値は『平城京発掘調査報告Ⅸ』（1978 年）で報告されている値と一致している。

第16図 第123 - 17次発掘遺構図

⑧ 右京二条四坊十五坪の調査（第 123 - 28 次）

調査地は、奈良市疋田町 1 丁目 9 番地にあり、平城京右京二条四坊十五坪の南辺にあたる。西京極から東へ約 70 m 離れたところで、標高約 90 m の丘陵上にあつて、これまで畑地であった。今回、ナニワミサワホーム K.K. から住宅建設の申請が出されたのにもなって、事前に発掘調査をおこなった。建設予定地の敷地には二条々間路の北側溝の存在が予想されたため、敷地東寄りに東西 3 m、南北 14 m の試掘溝を設けて調査した。

調査の結果、試掘溝の南 $\frac{2}{3}$ 強は、畑地の地表面下約 30 cm で黄白色の粘土層が平坦にあつて、これが地山面となる。試掘溝の北端より約 1.5 m 南では、東西方向に、緩い斜面をなして約 20 cm の深さで地山面が北へ下がり、その凹みに砂が堆積しており、砂層中には奈良時代の土器・瓦片若干を含んでいた。この東西の凹みの連続を確認するため、西約 6 m 離れた位置に 1 m $\times$ 2 m の南北試掘溝を設けたところ、ここでも同様に深さ約 10 cm 余の凹みが東西に存在することがわかった。しかし敷地の制約があつたため、この東西凹みの北岸は検出できていない。凹みの砂層からみて、東西方向の流水のあつた溝跡（幅 1.8 m 以上）と考えられるものであるが、条間路北側溝とするには検出延長が短いため断定はできない。また、路面敷についても後世の掘削により、旧路面と断定する遺構は何もなかった。

⑨ 右京三条一坊三条大路の調査（第 123 - 2 次）

本調査は奈良市横領町 167-1 で、住宅新築に先立つ事前調査として実施した。調査地は平城京右京三条一坊十二・十三坪にあたり、遺存地割から三条大路北側溝の存在が予測された。

本調査で検出した遺溝は三条大路北側溝 SD 01 と三条大路 SF 02 である。三条大路 SF 02 は後世の削平のためか、舗装等は認められない。三条大路北側溝 SD 01 は溝の作り替えから、4 度にわたる改修が考えられる。A)、当初の時期は検出面での溝南肩と一致する位置で掘り込まれるが北肩は不詳で幅は不明であるが、深さ約 1 m をはかる。B)・C)、南肩が約 2 m 北に移り幅は縮小され、2.4 m となる。南

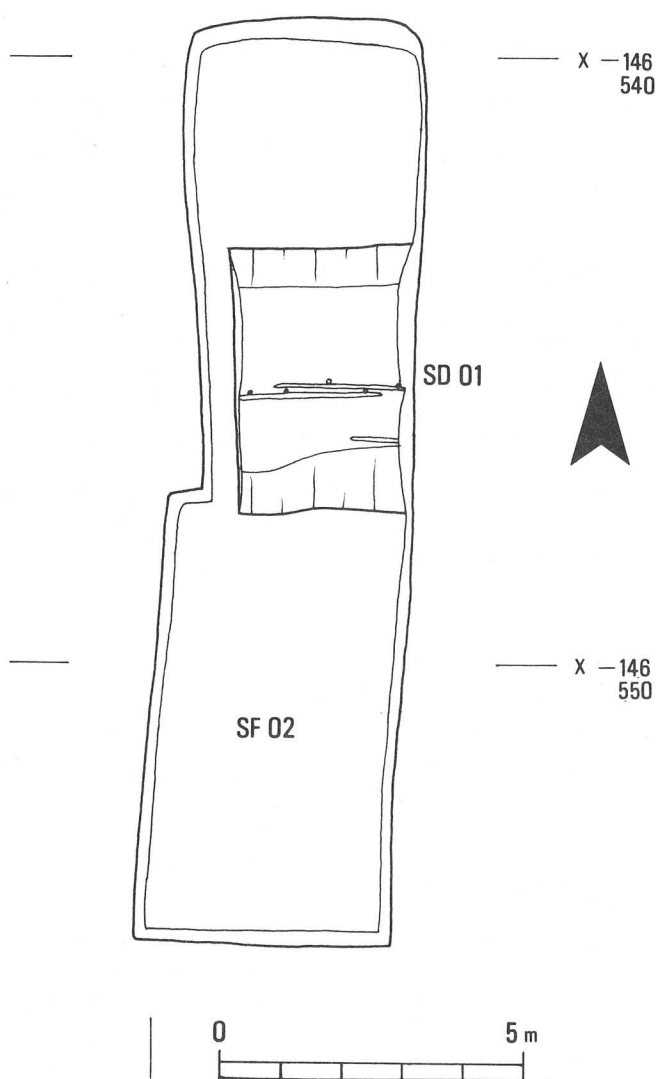
肩は堰板で護岸される。南側の堰板が古く（B）、北側の堰板（C）に改修される。Bでは深さ約80cm、Cでは深さ約70cmをはかる。D）、溝SD 01の最終段階で、南南肩はAと一致し、幅約3.9m、深さ約30cmである。Dは築地崩壊土と考えられる粘質土で埋められる。

出土遺物は三条大路北側溝SD 01からのものが多数を占め、瓦（軒平瓦2点）・

Y - 18 990

土師器・須恵器・木器および木簡1点がある。溝SD 01Cからは平城宮Ⅶ期の土師器（平安時代初頭）が出土しており、三条大路北側溝の廃絶時期の上限を知りうる。

なお、三条大路北側溝は本調査以外にも、1975年の橿原考古学研究所による左京三条二坊十三坪の調査^註(I)、平城宮跡第123-5次調査(II)でも検出されており、相互の溝心座標の比較で溝の国土座標に対する振れが確認できる。本調査区では最大幅心ⅢとB・Cの心Ⅳで比較する。ⅠとⅢでは $0^{\circ}19'50''$ 、ⅠとⅣでは $0^{\circ}17'16''$ 、ⅠとⅡでは $0^{\circ}19'44''$ 、ⅢとⅡでは $0^{\circ}19'01''$ 、ⅣとⅡでは $0^{\circ}25'05''$ 振れることとなる。このうち、Ⅳの数値は改修後のものであり、Ⅳが関連した



第17図 第123-2次発掘遺構図

ものを省くと、 $0^{\circ}19'01''\sim 0^{\circ}19'50''$ の振れとなり、三条大路北側溝の国土座標に対する振れは19'台のものと考えられる。従来、京の東西方向の振れは、左京においては4'～11'であることが知られており、今回の結果はそれらより大きい値が得られたことになる。また、南北方向では、朱雀大路が $0^{\circ}15'41''$ の振れをもっているが、三条大路北側溝の振れはそれよりも大きいものである。今後の条坊の東西方向、南北方向の調査結果がまたれる。

註 奈良県立橿原考古学研究所『平城京左京三条二坊十三坪』1975。

	X	Y
I 左京三条二坊十三坪	- 146,537.165	- 17,576.850
II 第 123 - 5 次	- 146,549.012	- 19,640.000
III 第 123 - 2 次	- 146,545.30	- 18,987.344
IV 第 123 - 2 次	- 146,544.25	- 18,987.344

第 2 表 方位計測座標表

⑩ 右京三条二坊十三坪の調査（第 123 - 5 次）

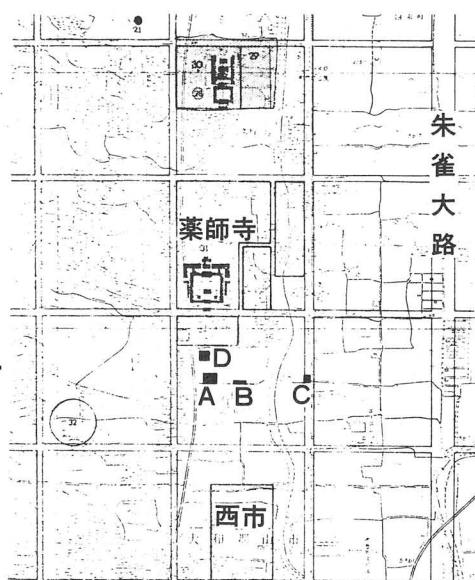
本調査は、三和銀行建設に伴う事前調査である。調査地は奈良市尼ヶ辻町 2241 にあり、右京三条二坊十三坪西南角にあたり、三条大路北側溝と西二坊大路東側溝の存在が予想された。調査は $14.8 \times 7.8\text{m}$ の L 字形トレンチを設けて実施した。

調査の結果、東西溝二条を検出した。トレンチの南端で検出した溝は、弓形にカーブしており幅約 0.3 m で浅く後世のものと考えられる。トレンチ中央で検出した溝は、深さ約 0.4 m、幅は 1 ～ 2 m で一定しない。この溝は、後世の削平を受けてはいるものの、ごく少数ではあるが奈良時代の土器片が出土しており、また第 123 - 2 次調査（右京三条一坊十二・十三坪）及び 1975 年橿原考古学研究所による左京三条二坊十三坪の調査等によって得られた成果をもとにした三条大路北側溝の推定位置ともおおむね一致していることにより、平城京の三条大路北側溝と考えてよいと思われる。これは遺存地割による条坊復原の結果とも矛盾しない。なお、西二坊大路東側溝については全く検出できなかった。今後の京内調査の成果の蓄積がまたれる。

遺物はわずかに瓦器を含む土器片と瓦片がそれぞれ若干出土したのである。

⑪ 右京七条二坊の調査（第124次）

本調査は薬師寺の駐車場建設および、その進入路工事に先立つ事前調査として行なった。調査地は薬師寺の位置する台地とは段差のある南側の沖積地で、西から東へとゆるやかに傾斜しており、調査地の東側には秋篠川が南流している。平城京条坊の右京七条二坊にあたり、進入路が七条々間路にあたるため、西から坊間小路との交差点位置にAトレンチ（十・十五坪）、坊間路との交差点位置にBトレンチ（七・十坪）、西一坊大路との交差点位置にCトレンチ（二坪）、十五坪内の建物建設予定地にDトレンチを設定した。

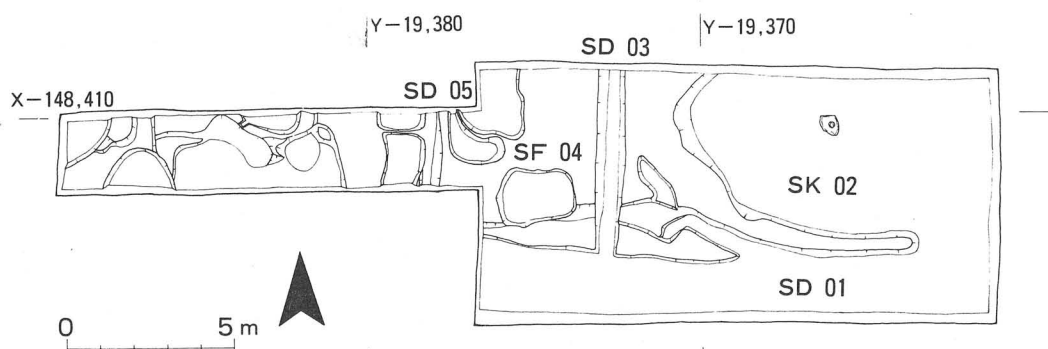


第18図 第124次発掘調査位置図

物建設予定地にDトレンチを設定した。

A・Cトレンチでは中世の土取りのため奈良時代の遺構は削平されており、Dトレンチでも奈良時代の遺構は存在しなかった。

Bトレンチは調査区の西半まで中世の土取りで奈良時代の遺構は破壊されているが、東半にはおよんでいない。検出した遺構には、溝SD01・03・05、土壇SK02、道路SF04がある。溝SD03・05は幅約1mの素掘りの南北溝で溝心々間距離約5.7mをはかる。両溝の間は坊間路SF04と推定できる。



第19図 第124次Bトレンチ発掘遺構図

SD01は東西溝で幅2 m以上である。土壌SK02からは多量の土器、瓦が出土した。

今回の調査で検出した唯一の条坊痕跡であるSF04は幅2丈と狭いが、本調査地西方の第100次調査（右京五条四坊三坪）および、東方（六条位置）での朱雀大路の調査成果から、西二坊々間路に比定できる。また、SD01も同様に七条々間路北側溝と想定できる。朱雀大路が国土方眼に対して北で15'41"西偏することを考慮して計算した基準尺は0.296 m強である。これまでに坊間路・条間路の両側溝を発掘調査した例は極めて少なく、第100次調査の五条々間路で幅2丈、1980年度奈良市調査の外京五坊々間路で幅3丈を検出しているだけである。宮城門に通じる条間・坊間路以外での幅員はその場所々々によって異なっていたものと考えられよう。今後の条間・坊間路の調査がまたれる。

なお、中世の土取り土壌からは瓦器碗が出土しており、それも白石編年のⅡ期におさまるもので、土取りが12世紀代におこなわれたものと考えられる。

	X	Y
第100次調査五条々間路心	— 147,353.135	— 20,208.000
“ 西三坊大路心	— 147,424.000	— 20,179.785
朱雀大路心	— 147,833.000	— 18,577.850
第124次調査西二坊々間路心	— 148,412.000	— 19,375.500
“ 七条々間路北側溝北肩	— 148,414.000	— 19,370.400

第3表 方位計測座標表

⑫ 右京九条二坊十二坪の調査（第123—19次）

本調査は、大和郡山市新紺屋町1-1での郡山農協事務所等建設に伴う事前調査で、右京九条二坊十二坪の南辺にあたり、九条大路北側溝の存在が予想された。

検出した主な遺構は近世の掘立柱穴・土壌等で、柱穴のうち2ヶ所では柱根が残っていた。出土した遺物は近世の陶磁器片・瓦器等である。九条大路北側溝を始めとする平城京関係の遺構の検出を目的として、トレンチ東半分を掘り下げたが、下層は灰色粘土の地山で側溝等の遺構は検出できなかった。